

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Advanced Techniques in Minimally Invasive Spine Surgery, Seattle, August 28 September 2, 2011
作成者（著者）	和田, 明人
公開者	東邦大学医学会
発行日	2012.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 59(2). p.99 100.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.59.99
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD00663197

Advanced Techniques in Minimally Invasive Spine Surgery, Seattle, August 28-September 2, 2011

和田 明人

東邦大学医学部整形外科第1講座



2011年8月28日から9月2日の6日間、アメリカ合衆国ワシントン州 Seattle において Advanced Techniques in Minimally Invasive Spine Surgery (MISS) のセミナーが開催され、主催者より招待、口演発表の機会を得た。また本セミナーではアメリカの最新脊椎低侵襲手術を見学できるとともに、日本では体験不可能な frozen cadaver を使用して実際に新しい device を用いた手術手技も体験できるとのことであったので、新しい知識と技術を学ぶのに非常に良い機会であった。日本からの参加は東邦大学整形外科から小生の他、名古屋第2赤十字病院整形外科・脊椎脊髄外科部長の佐藤先生、日本鋼管病院整形外科脊椎整形外科部長の大森先生、そして東京大学整形外科の原先生の4名で、その他中国から4名、ポーランドから2名の脊椎低侵襲手術に造詣の深い先生方が参加して来られた。さらにコースの moderator として新進気鋭の MD たち Jeffrey Roh, Addison Stone, Joseph Sohn の3名がアメリカから加わり、少数精鋭だがとても充実したものとなった。

初日は Seattle 郊外の病院で早朝7時から Dr Roh と Dr Stone による minimally invasive lateral lumbar interbody fusion with multi-level percutaneous pedicle screw fixation の手術を見学させていただいた (写真1)。従来の方法であれば一期的に前方後方同時にそれぞれ20数センチの切開で行う非常に侵襲度の高い手術であるが、minimally invasive technique では前方3センチ、後方2センチが数カ所の切開で行え、ほとんど出血もみられず非常に有用な術式であると実感した。今後は他の脊椎低侵襲手術手技同様、世界的に広まっていく可能性を感じた次第である。

翌朝は8時から Seattle 市内の cadaver center に会場を移し、午前中は日米の参加医師が1人発表時間20分、討論時間10分の時間配分で、いままで各個が施行してきた

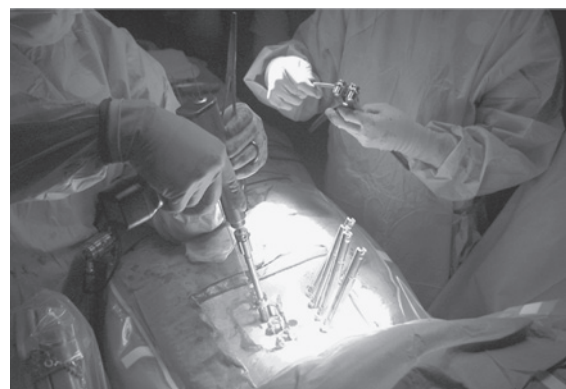


写真1 手術症例見学：新しい脊椎低侵襲用椎弓根スクリューを多椎間に設置しているところ。日本では手で椎弓根に刺入するが、見学時はパワーモーターを使用していた。



写真2 セミナー風景：筆者のプレゼンテーション

MISS につき討論し合った (写真2)。私も2年ぶりの英語での発表だったのでいささか準備が大変だったが、何とかつたない英語で「Which is less invasive? Which is familiar? Using tubular retractor or Wiltse approach for the single level minimally invasive transforaminal lumbar interbody fusion (MIS-TLIF)」のタイトルで発表・討論を行った。その際、日本には多くの脊椎後方除圧手技があるが、どれが最も低侵襲かつ容易なのか? 腰椎手術アプローチにおける背筋損傷のMRI評価は? といった質問を各国の先生から多々受けた。白熱した議論が展開され終了予定時刻が大幅に遅れてしまったため、簡単にランチを済ませ、午後からは実際に frozen cadaver を使って経皮的 pedicle screw による胸腰椎多椎間固定を経験させていただいた。ちなみに日本では解剖実習用の dry cadaver しかないうえ、このように手術手技の習得となると dry cadaver でさえ使用することができない。それに比べ frozen cadaver はほぼ実際の感覚と一緒に (当然出血はしないが…)、さらに施設のスタッフが付きっきりで X 線透視装置を操作してくれ

たので実に快適な環境での体験であった。体験してみた感想であるが、椎弓根 screw の刺入はいつも行っているのが簡単であったが、多椎間にわたる rod との連結にはなかなか経験とコツがあるようで難渋した。やはり「実際の手術でぶっつけ本番とはいかないな。」と痛感し、日本においても外科手術教育における cadaver training の重要性を再認識させられた。

最終日の朝は他の日本人の先生たちと市内の魚市場 (アラスカやカナダからの新鮮な鮭や平目、蟹がいっぱい) などを探索したり、スターバックス1号店を訪れたりしながらお土産あさりをし、ゆっくりとチェックアウトをして空港に向かい午後の便で帰国の途につき、10時間かけて無事成田空港に到着した。

最後に超多忙な日常診療業務の中、数日間にわたり快く小生を送り出してくださいました、整形外科第1講座勝呂徹教授ならびに脊椎スタッフをはじめ、執筆の機会を与えてくださいました関係者各位に深く感謝の意を表します。